

米野芦沼遺跡

(主) 渋川大胡線社会資本総合整備(活力基盤(交安))事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県前橋土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

前橋市富士見町米野の地は、江戸時代、沼田街道の宿場として栄え、現在も歴史的な景観を残しています。

この地を東西に貫く(主)渋川大胡線は、赤城南麓における重要な道路として広く県民の生活を支えておりますが、交通量の増加から、歩行者や自転車の安全な通行のため、歩道の建設が望まれていました。

本書の米野芦沼遺跡は、米野地区の中央に位置し、(主)渋川大胡線社会資本総合整備(活力基盤(交安))事業に伴い発掘調査された遺跡です。

調査は、群馬県前橋土木事務所から委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成24年度に実施し、縄文時代と平安時代の竪穴住居をはじめとする遺構や遺物を検出しました。これらの成果は、この地の長い歴史を物語る資料として、地域史解明に寄与できるものと考え次第です。

この発掘調査の実施から本書の刊行にいたるまでの間、群馬県前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、並びに地元関係者の皆様から多大な協力を賜りました。上梓にあたり、皆様方に心から感謝申し上げます。

平成24年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

- 1 本書は、(主)渋川大胡線社会資本総合整備(活力基盤(交安))事業に伴い発掘調査および整理された米野芦沼遺跡の調査報告書である。
- 2 米野芦沼遺跡は、群馬県前橋市富士見町米野1220-1、1260-1に所在する。
- 3 事業主体 群馬県前橋土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。
調査履行期間 平成24年(2012)6月1日～平成24年(2012)9月30日
(調査期間 平成24年(2012)7月1日～平成24年(2012)7月31日)
調査担当 麻生敏隆(上席専門員)
遺跡掘削工事請負 技研測量設計株式会社
地上測量委託 技研測量設計株式会社
- 6 整理事業の期間と体制は次のとおりである。
整理履行期間 平成24年(2012)9月1日～平成24年(2012)11月30日
(整理期間 平成24年(2012)9月1日～平成24年(2012)9月30日)
整理担当 新倉明彦(上席専門員)
- 7 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 新倉明彦
本文執筆 飯森康広(専門員(総括))
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺物観察 石器：岩崎泰一(上席専門員)、縄文土器：谷藤保彦(上席専門員)、土師器・須恵器：桜岡正信(資料統括事務取扱)、中世・近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員)、石材同定：飯島静男(群馬地質研究会)
遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐(総括))、保存処理：関邦一(補佐(総括))
- 8 発掘調査および本書作成に関しては、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々からご協力、ご指導をいただきました。記して感謝の意を表したい。
- 9 本遺跡の出土遺物と調査・整理の諸資料(遺構図・遺物実測図・写真類・各種台帳類)は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡 例

- 1 本遺跡は全て国家座標の日本平面直角座標第IX系(世界測地系)に基づき、挿図中に使用した方位記号は、全て国家座標北を指している。真北との偏差は、調査区中央付近で、東偏0度27分42秒である。
- 2 遺構・遺物実測図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
遺構 住居跡 1:60、住居跡のカマド 1:30、土坑 1:60、ピット 1:40
遺物 土器 1:3、石器 1:1、1:3、鉄製品 1:2
- 3 遺構の位置に関しては、グリッド標記を使用せず、座標値をそのまま使用した。

4 遺構図中の網掛けは、下記のとおりである。



5 住居の床面積は、デジタルプランメーターにより住居の壁の内側を3回計測した平均値である。遺構の計測値で全体を計測できないものについては、現存の値を()に記載し表示した。

6 竪穴住居の主軸方位については、カマドを有する辺に対して直交方向を主軸として計測した。カマドを有しないものについては、長辺を主軸として計測した。

7 火山噴火物の表記は下記のとおりである。なお、一次堆積の場合はテフラ名(As-Bなど)を使用し、埋没土に含まれる場合は軽石名として、FPなどを使用した。

Hr-FP：榛名二ツ岳軽石(6世紀中葉)、As-C：浅間C軽石(3世紀末～4世紀初頭)

As-YP：浅間板鼻黄色軽石、As-Sr：浅間白糸軽石、As-BP：浅間板鼻褐色軽石

As-MP：浅間室田軽石、Hr-HA：榛名八崎火山灰

8 遺構名称および付番については、原則調査時点のものをそのまま使用した。このため、以下のとおり欠番が生じた。
土坑：7

9 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

- ・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。
- ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
- ・計測値の口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径を示す。
- ・金属器観察表の計測値に()がついているものは残存部分での値である。
- ・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。
- ・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線條痕の走行を示す。

10 陶磁器以外の土器に関する分類上の大小は以下による。

- ・灰釉陶器：大型品(壺類)、小型品(椀・杯・皿類)
- ・須恵器：大型品(壺甕類・羽釜・瓶類)、中型品(高杯・盤類・ハソウ)、小型品(椀・杯・皿類)
- ・土師器：大型品(壺・甕類、土釜)、中型品(高杯類、古式土師小型丸底壺など)、小型品(椀・杯類、手捏ね)

11 本書で掲載した地形図は下記のものを使用した。

国土地理院 地形図1：25,000「渋川」(平成14年5月1日発行)

前橋市現形図

目次

序

例言・凡例

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
1 グリッド及び調査区の設定	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	3
4 整理作業の方法	3

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地	4
第2節 周辺の遺跡	4

第3章 発掘調査の記録

第1節 遺跡の概要	7
1 遺構の概要	7
2 基本土層	7
第2節 遺構と遺物	8
1 竪穴住居	8
2 土坑	14
3 ピット	17
4 遺構外出土遺物	17
第3節 まとめ	19

報告書抄録	20
-------	----

写真図版

挿 図 目 次

第1図	米野芦沼遺跡調査区位置図	2	第7図	2号住居	12
第2図	周辺遺跡	6	第8図	2号住居と出土遺物	13
第3図	米野芦沼遺跡全体図	7	第9図	1～6、8・9号土坑と1号土坑出土遺物	15
第4図	1号住居	8	第10図	3号土坑出土遺物	16
第5図	1号住居出土遺物(1)	9	第11図	ピット	17
第6図	1号住居出土遺物(2)	10	第12図	遺構外出土遺物	18

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	5	第4表	2号住居出土遺物観察表	11
第2表	1号住居出土遺物観察表(1)	8	第5表	土坑出土遺物観察表	16
第3表	1号住居出土遺物観察表(2)	10	第6表	遺構外出土遺物観察表	18

写真図版目次

P L . 1	調査区東側全景(東から)	6号土坑土層断面(南から)	
	調査区東側全景(西から)	8土坑全景(南から)	
	調査区西側全景(東から)	8土坑土層断面(南から)	
	1号住居全景(北から)	9号土坑全景(南から)	
	1号住居遺物出土状態(北から)	1号ピット全景(南から)	
P L . 2	1号住居掘り方全景(西から)	1号ピット土層断面(南から)	
	2号住居掘り方全景(西から)	2号ピット全景(南から)	
	2号住居全景(西から)	2号ピット土層断面(南から)	
	2号住居土層断面(南から)	P L . 5	3号ピット全景(南から)
	2号住居カマド全景(西から)		4号ピット全景(南から)
P L . 3	2号住居カマド掘り方全景(西から)		5号ピット全景(南から)
	2号住居カマド土層断面(西から)		3号ピット土層断面(南西から)
	2号住居内土坑1土層断面(南から)		4号ピット土層断面(南から)
	2号住居カマド掘り方土層断面(北西から)		5号ピット土層断面(南から)
	2号住居P1土層断面(南から)		6号ピット土層断面(北から)
	2号住居内土坑2土層断面(北から)		7号ピット全景(南から)
	1号土坑全景(南から)		8号ピット全景(南から)
	1号土坑土層断面(南から)		1号旧石器調査坑土層断面(南から)
P L . 4	2号土坑全景(南から)		
	2号土坑土層断面(南から)	P L . 6	1号住居出土遺物
	3号土坑調査風景(北から)	P L . 7	2号住居、3号土坑出土遺物
	4号土坑全景(東から)	P L . 8	遺構外出土遺物
	4号土坑土層断面(南西から)		
	5号土坑土層断面(南から)		

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過

本遺跡は前橋市富士見町であり、周辺は、縄文時代の集落として前橋市の遺跡台帳に登録されており、工事が計画された地点はその包蔵地内に所在する可能性が考えられた。

このため、平成23年6月22日付けで、埋蔵文化財の状況について群馬県土木整備部建設企画課(前橋土木事務所)から群馬県教育委員会文化財保護課に照会がなされた。同年6月29日、群馬県教育委員会文化財保護課は、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地内ではないものの、近隣に周知の埋蔵文化財包蔵地があることから、試掘・確認調査が必要であることを前橋土木事務所に回答した。これにより、同年7月26日、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査が行われ、遺跡地と認定された。この結果を受けて、同年11月14日、本遺跡は新規に周知の埋蔵文化財包蔵地(米野芦沼遺跡)とされた。その後調整の結果、平成24年8月31日付けで、群馬県前橋土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、調査面積210㎡の発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査の方法と経過

1 グリッド及び調査区の設定

事業の性格上広範な調査が見込まれないため、新たな地区呼称は行わず、国家座標値をそのまま使用した。調査グリッドは、5m間隔の方眼とし、グリッド番号は、各座標値の下3桁の値を用い、X軸-Y軸の順に併記した。たとえば、X座標51540、Y座標-69300の場合、このグリッドは「540-300」となる。

調査の進捗にあわせて、便宜上東側・西側という呼称を使用した。調査区は分割せず区名称は設定していない。

2 調査の方法

本遺跡は、県道渋川大胡線と県道津久田停車場前橋線の交差点からその沿道に位置し、住宅が立ち並び、交通量も多いため、調査に際しては安全柵を設置し、作業の安全確保に努めた。また、排土置き場を確保するため、調査区を東西に分け、東側を先行して調査を行った。

表土掘削については、地表下の土層攪乱が著しく、加えて指標となる火山噴出物の一次堆積層も認められなかったため、ローム漸移層を遺構確認面とした。層厚約50cmをバックホーによって掘削したのち、人力による遺構検出作業を行った。この結果、縄文時代・平安時代の竪穴住居などが確認された。また、調査区全域でローム層が良好に堆積していたため、2×2mの調査坑2か所(第3図)を設定し、旧石器時代の確認調査を行ったが、遺構遺物とも発見されなかった。

遺構調査に際しては、埋没土層の確認用ベルトを任意に設置し、ジョレン・移植ゴテほかにより掘削を行った。遺構名称は、調査の進行にあわせて適宜付番した。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影により行った。遺構の平面測量は、デジタル平板測量を適宜実施した。縮尺は遺構の性格に合わせ、1/10、1/20、1/40を選択した。断面測量は、個別に水系により基準標高を設置し、メジャー、標尺ほかを使用して、手書きによる図化を行った。

遺構写真は、モノクロ写真を6×7版フィルム撮影し、カラー写真はデジタルカメラを使用して、DVDによるデータの記録保存を行った。



第1図 米野芦沼遺跡調査区位置図(前橋市役所発行、2500分の1前橋現形図)
(平成21年測図、富士見地区は平成23年測図)を使用)

3 調査の経過

調査日誌抄録

平成24年(2012)

- 7月2日 バックホーによる調査区東側部分の掘削作業開始。
- 7月3日 東側部分の遺構確認作業開始。縄文土器など出土。
- 7月4日 土坑・ピット調査開始。
- 7月10日 旧石器時代確認調査開始。
- 7月13日 東側調査終了。埋め戻し及び西側部分の掘削作業、遺構確認作業開始。
- 7月17日 1号住居調査開始。
- 7月25日 2号住居調査開始。
- 7月27日 西側部分調査終了及び埋め戻し終了。

4 整理作業の方法

整理作業は、平成24年9月1日から同月30日まで実施し、引き続き印刷を委託し、刊行を行った。

遺構図面は調査時作成の図面を元に修正作業・計測作業を行い、デジタルトレース、版下作成を行った。

出土遺物は、出土遺構・地点ごとに接合作業を行った後、掲載遺物を選定した。次いで、デジタル撮影による遺物写真撮影を行ったのち、遺物実測を行った。実測に際しては、デジタル写真実測と三次元計測機を併用して素図を作成・精図し、引き続いてトレース図を作成した。

遺物トレース図はスキャニング作業を行ってデジタル化し、版下作成を行った。

掲載資料は、台帳作成後収納作業を行った。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

本遺跡は、赤城山南東麓にあたり、山頂カルデラ内の^{おの}大沼から南東約11kmに位置している。赤城山の最高点は^{くろびやま}黒檜山山頂の1827.6mであり、この高さと比較して山体の占める面積が大きいことが特徴となっている。赤城山の火山活動の始まりは、約40～50万年前からと言われ、古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の三つの時期に分けられている。古期成層火山の形成期は、およそ13万年前まで続いたとされる。次いで、新期成層火山の形成期は、約13万年前に始まり、4～5万年前ころまで続いたと考えられている。この時期は火砕流を伴う噴火が多く、山麓に流下して堆積した。その後、カルデラが形成され、約3.1～3.2万年前に山頂部が大規模な軽石噴火を起こし、鹿沼軽石が東方に広く降下した。この噴火の後、カルデラの中では溶岩が噴出し、長七郎山・見晴山・地藏岳などの中央火口丘群が出現し、^こ小沼が形成された。

中央火口丘群の形成後、地形は浸食作用により変化を生じていく。本遺跡の南東約2kmを南西に流れる赤城白川は、地藏岳の西から開析して削られた土砂により、白川扇状地を形成した。しかし、それは富士見石井から原之郷を西限とし、細ヶ沢川を境として西方の富士見町米野や横室には及んでいない。このため、米野から以西は深い開析谷と台地が細かく連続する起伏の大きな地形となっている。

本遺跡は南西に向かって樹枝状に伸びた台地の頂部に位置している。東方には法華沢川により深い谷が形成され、西方は橘川やその支流によって数条の谷筋が入り込んでいる。また、周辺では、南東約650mに位置する十二山をはじめ、橘山、城山など、周辺との比高20～90mの火山性泥流丘が点在し、傾斜面地形の中で異なった様相を示している。

第2節 周辺の遺跡

『群馬県史』によれば、本地域では後期旧石器文化に属する遺跡として、龍ノ口遺跡、石井一区遺跡、米野丸山遺跡、市ノ木場遺跡、精進場遺跡が挙げられ、石器が断面採集されている。また、発掘調査では小原目遺跡(17)で、黒色安山岩を石材とする剝片44点が出土している。

縄文時代の遺跡は、本遺跡が位置する赤城山南西麓の全体的な傾向として、前期と中期が多い特徴がある。周辺では、窪谷戸遺跡(2)で前期前半の住居1軒が検出され、その北側に近接する見眼遺跡A地区(3)では中期の住居2軒と土坑50基が発見されている。本遺跡で検出された中期後半の住居1軒も、同じ集落範囲に含まれる可能性がある。

弥生時代の遺構は、周辺で確認されていないが、田中田遺跡(16)で中・後期の遺物が出土している。

本遺跡の南方約2kmには6世紀前半の前方後円墳である九十九山古墳が存在する。また、米野から引田、原之郷、時沢には、古墳時代の後期～終末期古墳が集中して存在している。陣場・庄司原遺跡群(10)では、古墳時代前期の方形周溝墓5基、6世紀後半から8世紀初頭にわたる7基の古墳が調査されている。周辺も含めて墓域が散在するあり方は、一般的な群集墳と異なる点で注目されている。古墳時代の集落では、古墳時代前期から後期まで継続する田中田遺跡があり、陣場・庄司原遺跡群と関係する集落として想定されている。

赤城山西麓の平安時代遺跡として近年脚光を浴び、県指定史跡となったのが、渋川市赤城町三原田に所在する「三原田諏訪上遺跡瓦塔設置仏教遺構」である。ここでは、掘り込み地業を伴う瓦塔設置基壇が発見され、多くの瓦塔・瓦堂片や瓦片が出土することから、建物の存在も想定されている。周辺には8世紀後半から10世紀前半にわたる集落も検出されており、小規模集落と仏教遺構との関係をめぐる貴重な事例となっている。こうした状況下において、本遺跡周辺では、窪谷戸遺跡で奈良時代28軒、平安時代16軒の住居が検出される。また、見眼遺跡A地

区では9軒、見眼遺跡B地区(4)では14軒、奈良～平安時代の住居が調査されており、本遺跡周辺が比較的大きな集落である可能性を示している。

本地域の南方には、伊勢神宮内宮の神領とされる青柳御厨、細井御厨が設置されており、中世でも比較的要地であったと推測される。おそらく、桃ノ木川が利根川の本流であったことも関係しようが、その後背地に当たる本地域もその影響が想定される。本地域では、守護上杉氏の執事を務める長尾氏の一族漆窪長尾氏が拠点とした漆窪城(33)が知られるが、史料に乏しく実態は不明である。享徳の乱(1455～1485年)では、文明9年(1477)に太田道灌らが、敵対する古河公方方の下野勢を本地域に誘い込み、「塩壺原」(推定 庄司原)で待ち構え、「引田切所」(ともに富士見町)を前に合戦に臨んだとされている(「太田道灌状」)。このような出来事から考えても、本地域が守護勢力の強い影響下にあったことは間違いない。十二山の周辺から南面には、森山城(35)や横室の寄

居(39)などが点在し、この谷間が軍事的な要所であったことも推測される。また、永禄4年(1561)頃作成された「関東幕注文」(上杉家文書)では、厩橋衆として「引田伊勢守」が挙げられており、この頃在地勢力として引田氏が有力であったと考えられる。『群馬県の中世城館跡』によれば、近隣に米野屋敷(32)があり、天正末期(1590頃)甲斐栗原氏の屋敷とされるが、詳細は不明である。また、箱田屋敷(40)や丸山城(34)に加え、発掘調査により窪谷戸遺跡、向吹張遺跡(5)で大型の溝が発見されるなど、中世の屋敷遺構が比較的多くみられる地域である。

近世において、本地域は沼田街道の宿場米野宿として発展を遂げる。沼田藩主の公用路の宿場として街割がなされたと言われている。米野宿は沼田街道に沿う街村として、南北約八町(約870m)の長さを持ち、宿の南北には松並木があったという。本遺跡周辺は、大胡街道との交差点にあたることから、宿屋や問屋が集中していた。

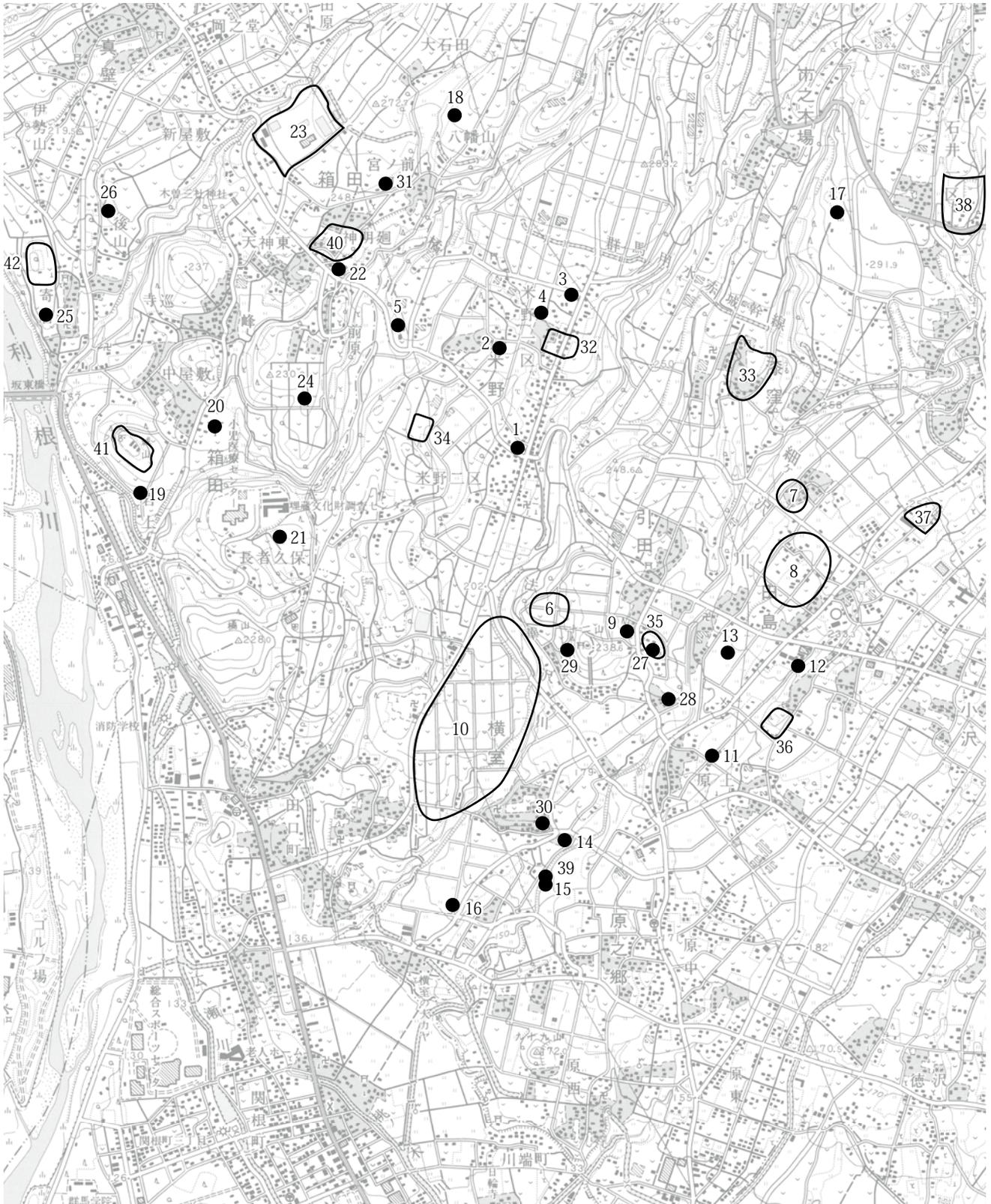
基本文献 群馬県史編さん委員会1990『群馬県史』通史編原始古代1

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等 ●墳墓 □水田・畠 凸城館					参考文献	
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安		中世
1	米野芦沼遺跡	前橋市富士見町米野芦沼		○			○	○	本報告書
2	窪谷戸遺跡	前橋市富士見町米野窪谷戸		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群発掘調査概報窪谷戸、見眼A、見眼B遺跡』1985
3	見眼遺跡A地区	前橋市富士見町米野見眼		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群発掘調査概報窪谷戸、見眼A、見眼B遺跡』1985
4	見眼遺跡B地区	前橋市富士見町米野見眼		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群発掘調査概報窪谷戸、見眼A、見眼B遺跡』1985
5	向吹張遺跡	前橋市富士見町米野向吹張尺神		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群向吹張遺跡 岩ノ下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡』1987
6	愛宕山遺跡	前橋市富士見町横室字愛宕山							富士見村教育委員会：『富士見遺跡群愛宕山遺跡 初室古墳 日向遺跡』1994
7	赤城遺跡	前橋市富士見町鳥字赤城					○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群赤城遺跡・長泉寺遺跡』1993
8	長泉寺遺跡	前橋市富士見町字長泉寺		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群赤城遺跡・長泉寺遺跡』1993
9	日向遺跡	前橋市富士見町引田字日向						凸	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群愛宕山遺跡 初室古墳 日向遺跡』1994
10	陣場・庄司原古墳群	前橋市富士見町横室字陣場・上庄司原・下庄司原		○	○●		○	○	富士見村教育委員会：『陣場庄司原遺跡群』1991
11	由森遺跡	前橋市富士見町鳥字由森		○			○		富士見村教育委員会：『富士見遺跡群白川遺跡 由森遺跡 久保田遺跡』1989
12	白川遺跡	前橋市富士見町鳥字白川		○			○		富士見村教育委員会：『富士見遺跡群白川遺跡 由森遺跡 久保田遺跡』1989
13	久保田遺跡	前橋市富士見町原ノ郷字久保田		○			○	○	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群白川遺跡 由森遺跡 久保田遺跡』1989
14	田中遺跡	前橋市富士見町横室字田中		○					富士見村教育委員会：『富士見遺跡群向吹張遺跡 岩ノ下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡』1987
15	寄居遺跡	前橋市富士見町横室字寄居						凸	富士見村教育委員会：『富士見遺跡群向吹張遺跡 岩ノ下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡』1987
16	田中田遺跡	前橋市富士見町横室字田中田		○					富士見村教育委員会：『富士見遺跡群田中田遺跡 窪谷戸遺跡 見眼遺跡』1986
17	小原目遺跡	前橋市富士見町漆窪字北小原目・石井字中小原目・市之木場字下小原目	○	○			○	○	富士見村遺跡調査会：『小原目遺跡(一次・二次調査)』1998
18	八幡山遺跡	渋川市北碓町箱田字八幡山		○			○	○	北碓村教育委員会：『村内遺跡VI』1998
19	城山遺跡	渋川市北碓町下箱田字城山・悪戸上・向山・下篠		○			○	凸	北碓村教育委員会：『北碓遺跡群発掘調査報告書I城山遺跡』1989
20	東篠遺跡	渋川市北碓町下箱田字東篠・西篠		○			○	○	北碓村教育委員会：『東篠遺跡・瓜山遺跡』1991
21	瓜山遺跡	渋川市北碓町下箱田字瓜山		○			○	○	北碓村教育委員会：『東篠遺跡・瓜山遺跡』1991
22	西浦遺跡	渋川市北碓町小室字西浦		○			○		北碓村教育委員会：『村内遺跡VIII』2000
23	箱田遺跡群	渋川市北碓町箱田字上原・三角		○			○	○	北碓村教育委員会：『箱田遺跡群(上原・三角遺跡)真壁諏訪遺跡』1999
24	芝山遺跡	渋川市北碓町下箱田字今朝久保・向芝山・西前原・芝山		○			○	○	北碓村教育委員会：『芝山遺跡I』1993
25	真壁城山遺跡	渋川市北碓町真壁字城山		○					渋川市教育委員会：『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・東久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』2012
26	八幡塚古墳	渋川市北碓町真壁字丸山			●				北碓村教育委員会：『村内遺跡IV』1996
27	森山古墳	前橋市富士見町横室字道上			●				富士見村『続富士見村誌』1979 / 上毛古墳総覧6号
28	道上古墳	前橋市富士見町横室字道上			●				富士見村『続富士見村誌』1979
29	初室古墳	前橋市富士見町横室字初室			●				富士見村教育委員会：『愛宕山遺跡 初室古墳 愛宕遺跡 日向遺跡』1994
30	横室古墳	前橋市富士見町横室字中			●				富士見村『続富士見村誌』1979
31	朝日塚	渋川市北碓町箱田字宮廻			●				上毛古墳総覧13号
32	米野屋敷	前橋市富士見町米野						凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
33	漆窪城	前橋市富士見町漆窪						凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988

第2章 遺跡の立地と環境

34	丸山城	前橋市富士見町				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
35	森山城	前橋市富士見町引田				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
36	田島城	前橋市富士見町田島				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
37	新井館	前橋市富士見町田島				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
38	岡城	前橋市富士見町石井				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
39	横室の寄居	前橋市富士見町横室				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
40	箱田屋敷	渋川市北橋町箱田				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
41	箱田城	渋川市北橋町下箱田字城山				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
42	真壁城	渋川市北橋町真壁				凸	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988



第2図 周辺遺跡(国土地理院1/25000、「渋川」使用)

第3章 発掘調査の記録

第1節 遺跡の概要

1 遺構の概要

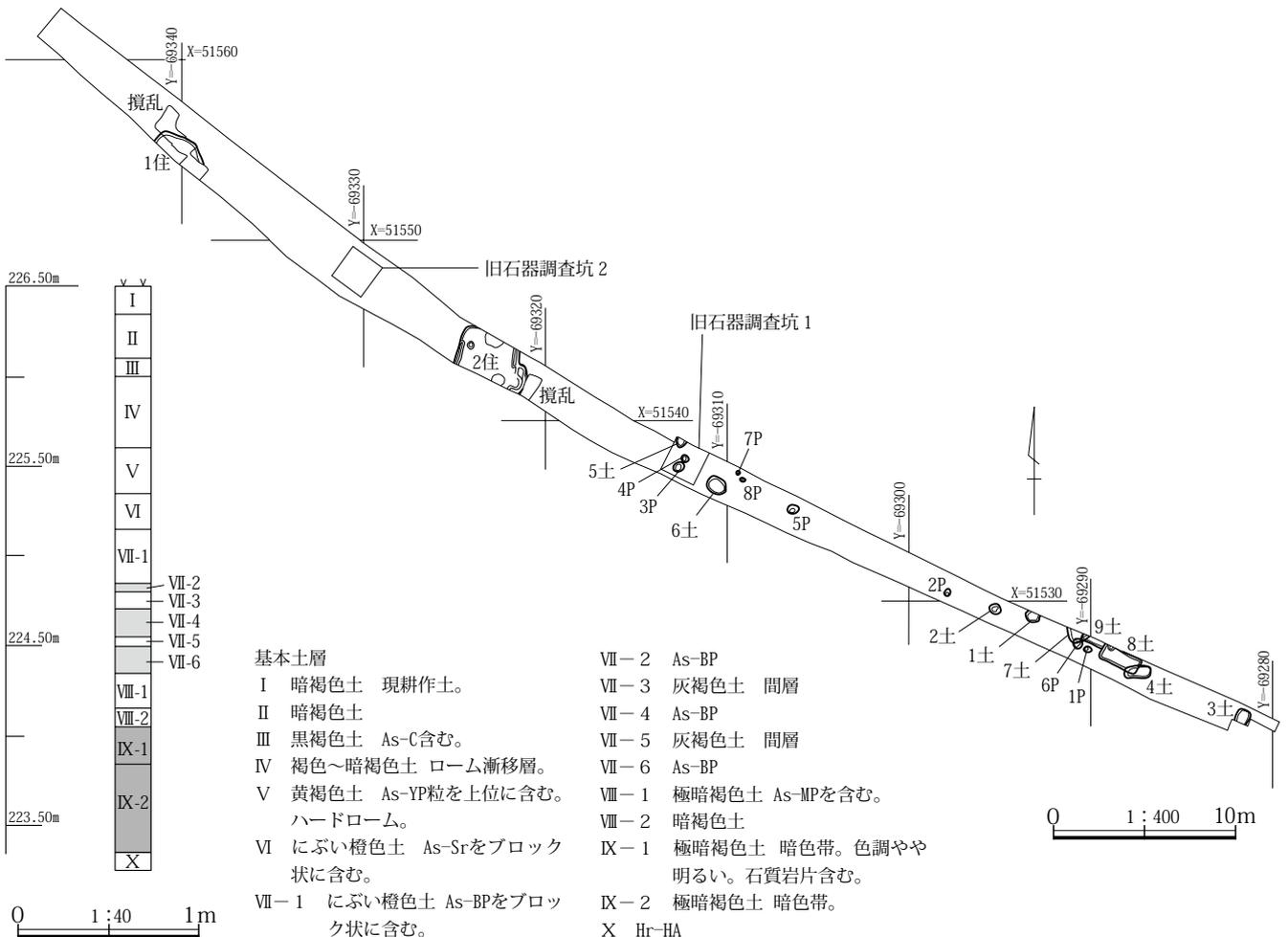
本遺跡では、住居2軒、土坑8基、ピット8基を検出した。調査は県道に沿って細長く行ったものであり、最大幅でも約3mに過ぎない。このため、検出された住居は2軒とも一部しか調査できていない。1号住居は縄文時代中期に属しており、調査区西側に離れて見つかった。同時期では陥し穴とみられる3・4号土坑があり、調査区の東端に位置する。やせ尾根状の台地頂部を選んでいる点を確認できる。2号住居は平安時代であり、調査区中央に位置する。ほぼ同時期では小規模な1号土坑がある。土坑は全体で8基であり、残る5基のうち3基は時期不詳であり、2基は中世以降であろう。土坑・ピット

は、全体として調査区東端にかたまっており、東側で交差する沼田街道に關係して形成された居住域に属する可能性が高い。

2 基本土層

調査区のはば中央に設置した旧石器調査坑1に同2の成果を加味して、基本土層を作成した。

地表下40cmには、わずかに白色軽石が含まれ、層位からこの軽石はAs-Cに比定される。このIII層の厚さは5cmと薄く、調査ではこの下層を掘り下げ、ローム漸移層であるIV層上面で遺構確認を行った。また、ローム層は良好に堆積しており、間層を挟んでAs-BPグループとして6層準が確認でき、最下層IX層ではHr-HAが堆積している(早田勉氏ご教示による)。



第3図 米野芦沼遺跡全体図

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居

竪穴住居は2軒見つかり、縄文時代の1号住居は調査区西端に離れており、周辺に遺構は見られない。平安時代の2号住居は調査区中央に位置する。調査した幅員が狭いため、ともに全体は調査できていない。

1号住居(第4～6図、第2・3表、P.L. 1・2・6)

位置 541-320。

重複 なし。

形態 著しく攪乱されて不明な部分が多いが、不整円形

か。

主軸方位 不明。

規模 面積(8.41)m² 長軸(1.45)m、短軸3.04m 残存壁高11cm～22cm

埋没土 残存する深さが浅いため、埋没状況不詳。

炉・柱穴 検出されなかった。

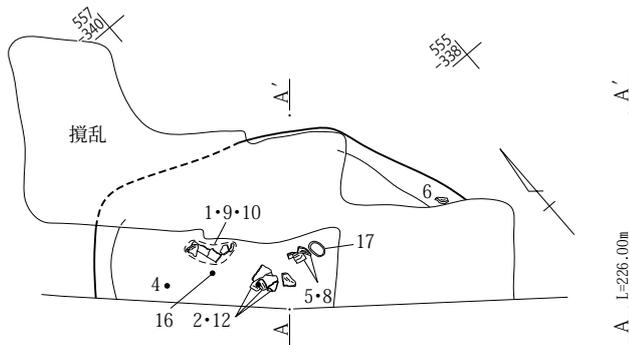
床 明確な床面は確認できていない。

掘り方 残存部分で深さ約15cm掘り込まれる。

遺物 掲載遺物のほか、近世以降の陶磁器5点が混入する。

時期 出土遺物から縄文時代中期後半(加曾利E3式期)に比定される。

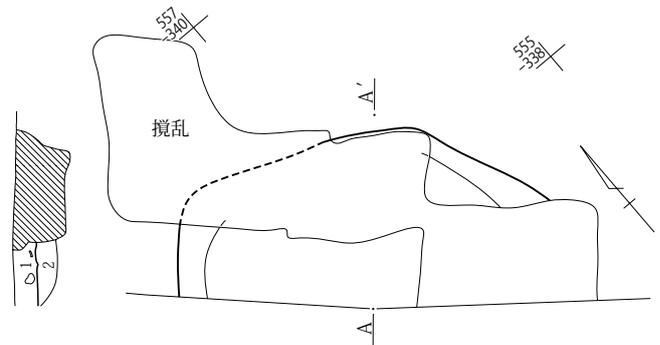
使用面



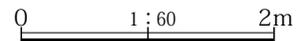
1号住居

1 暗褐色土 ロームブロック1%含む。

掘り方



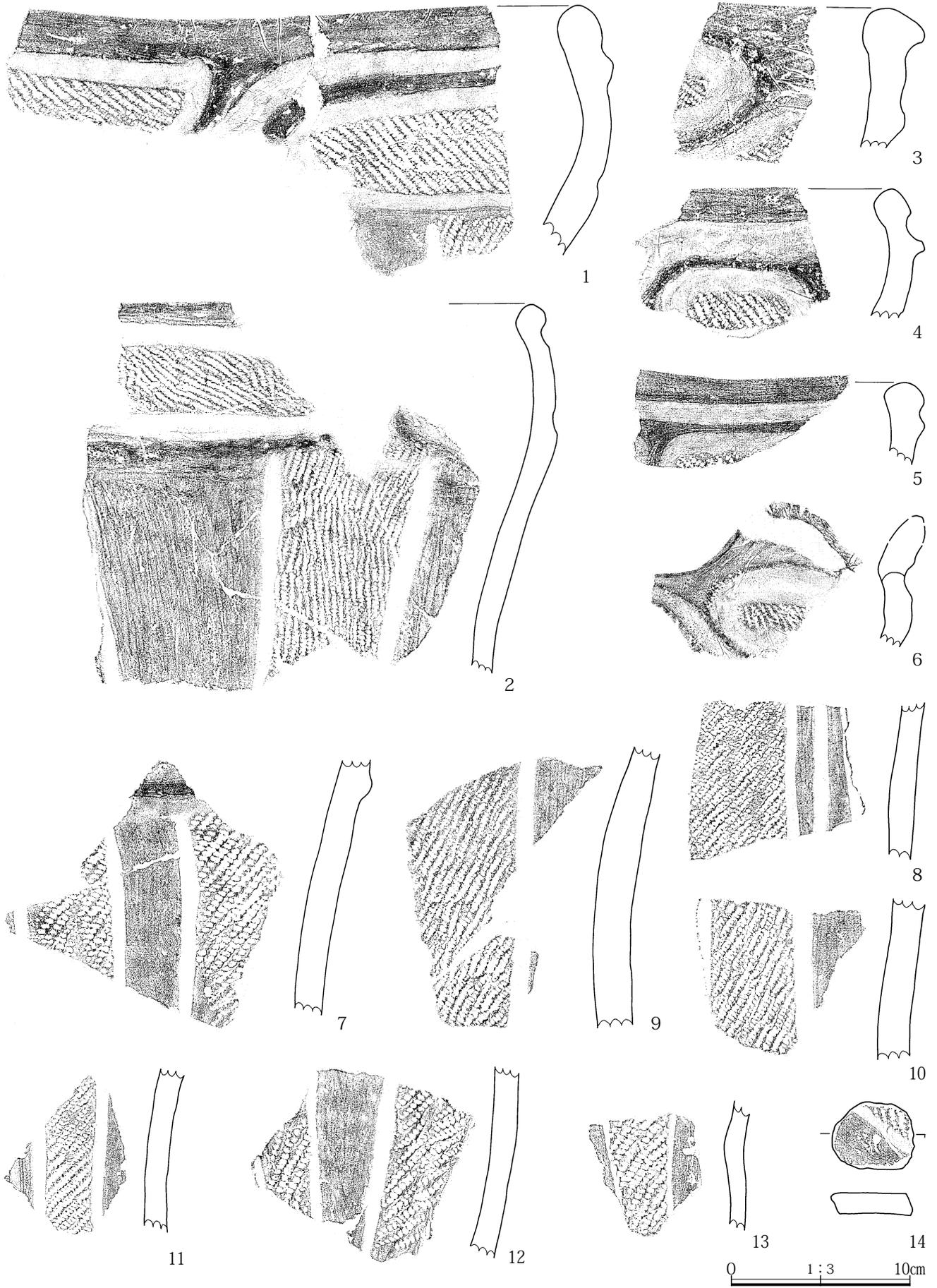
2 暗褐色土 ロームブロック10%含む。



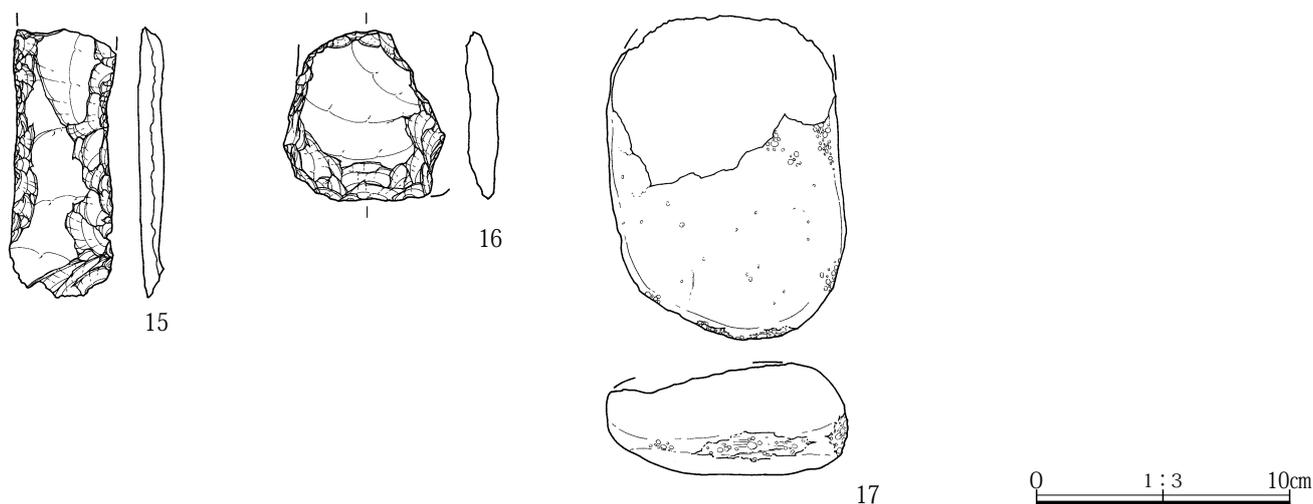
第4図 1号住居

第2表 1号住居出土遺物観察表(1)

No.	挿図No. PL.No.	種別 器種	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+1 口縁部片	粗砂、白色 粒	黄褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内に横位回転のRLの縄文を施す。胴部は懸垂文で区画され、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
2	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+4 口縁部片	粗砂、細礫、 白色粒	黄褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内に縦位回転のLRの縄文を施す。胴部は懸垂文で区画され、縦位の区画帯内には無文帯と斜位回転のLRの縄文を施す。	加曾利E3
3	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 白色粒	黄褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内に横位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
4	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	掘り方 口縁部片	粗砂、白色 粒	黄橙	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内に横位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
5	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+11 口縁部片	粗砂、細礫	黒褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内に横位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
6	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	粗砂、白色 粒	黄橙	ふつう	内反する突起状の波状口縁で、口縁部に隆帯と太い沈線で円形や楕円等の文様を描き、区画内に横位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
7	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	胴部片	粗砂、白色 粒	黄褐	ふつう	口縁部に隆帯と太い沈線で文様を描き、胴部は懸垂文で区画され、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
8	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+11 胴部片	粗砂、白色 粒	黄褐	ふつう	胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
9	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+1 胴部片	粗砂、白色 粒	黄橙	ふつう	10と同一個体。胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3



第5図 1号住居出土遺物(1)



第6図 1号住居出土遺物(2)

第3表 1号住居出土遺物観察表(2)

No.	挿図No. PL.No.	種別 器種	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
10	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+1 胴部片	粗砂、白色 粒	黄橙	ふつう	9と同一個体。胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
11	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	胴部片	粗砂	黄褐	ふつう	胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転の0段多条のRLの縄文を施す。	加曾利E3
12	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	+12 胴部片	粗砂、細礫	褐橙	ふつう	胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
13	第5図 PL. 6	縄文土器 深鉢	胴部片	粗砂	褐橙	ふつう	胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
14	第5図 PL. 6	縄文土器 土製品	完形	粗砂、白色 粒	褐橙	ふつう	円形の土製円板。周囲には部分的に研磨がみられ、下端を僅かに欠損。土器の胴部片利用で、懸垂文と縦位回転のRLの縄文を施す。縦(3.8)cm、横4.5cm、厚さ1.2cm。	加曾利E3

No.	挿図No.	器種	出土位置 残存	形態・素材	製作状況・使用状況	石材	長さ	幅	厚さ	重さ(g)
15	第6図 PL. 6	打製石斧		短冊型	完成状態? 幅広剥片を横位に使い、両側縁を加工して形状を整える。頭部欠損。	黒色頁岩	(10.6)	4.1	1.1	51.8
16	第6図 PL. 6	打製石斧	+5	分銅型	完成状態。刃部破片で、エッジに摩耗痕が残る。破損部上端を再加工しており、削器として再利用された可能性が残る。	ホルンフェルス	(6.7)	6.3	1.2	61.9
17	第6図 PL. 6	敲石	+2	扁平礫	上端側小口部に敲打痕がある。器体下部を欠損する。	粗粒輝石安山岩	(12.9)	9.4	4.4	555.2

2号住居(第7・8図、第4表、P.L. 2・3・7)

位置 553-338。

重複 なし。

主軸方位 N-16°-E

規模 面積(20.08)m² 長軸(2.40)m、短軸3.36m 残

存壁高 東辺0.52cm・西辺0.40cm・北辺0.33cm

埋没土 ロームの混入の少ない暗褐色土を中心に埋まる。自然埋没と思われる。

カマド 東壁中央に付設され、燃烧部は壁面に一致する。

カマドの全長は(78)cmで、燃烧部の長さは62cm、両袖が残っておらず全幅は不明で、確認面から燃烧部面までの深さは58cmである。焚き口幅は69cmである。構築材としてにぶい橙色粘土を用い、左袖は補強材として礫を立てている。住居の外側に半円形に粘土が回っており、煙道部が作られていたものと考えられる。掘り方規模は全長

(145)cmで幅は(102)cm、掘り方の深さは7cmである。また、煙道部の作り出しを含めると、幅は(165)cmに及ぶ。

柱穴 P1のみが見つかる。規模は長軸43cm短軸37cm深さ18cmである。浅く明確でない。

床 貼り床は床下土坑2の上面に見られるが、範囲は判

然としない。カマド前面に焼土が広がり、左袖前面から左側に灰が付着する。

周溝 東辺のカマド左袖前から東側と、西辺の中央部に周溝がめぐる。東辺では長さ(115)cm、幅26cm、深さ最大6cmである。西辺は長さ(135)cm、幅32cm、深さ最大6cmである。

床下土坑1 北東隅近い壁面に接する。平面形は円形で断面皿状。規模は長径(72)cm短径(66)cm深さ19cmである。

床下土坑2 中央南寄りにあり、上位に貼り床が見られる。南側半分は調査区域外となる。平面形はほぼ円形か。規模は長径51cm短径(22)cm深さ15cmである。

掘り方 全体として掘り込みは浅く、床下土坑など部分的に掘り込まれる。西壁から中央部にかけて床下溝が掘り込まれる。

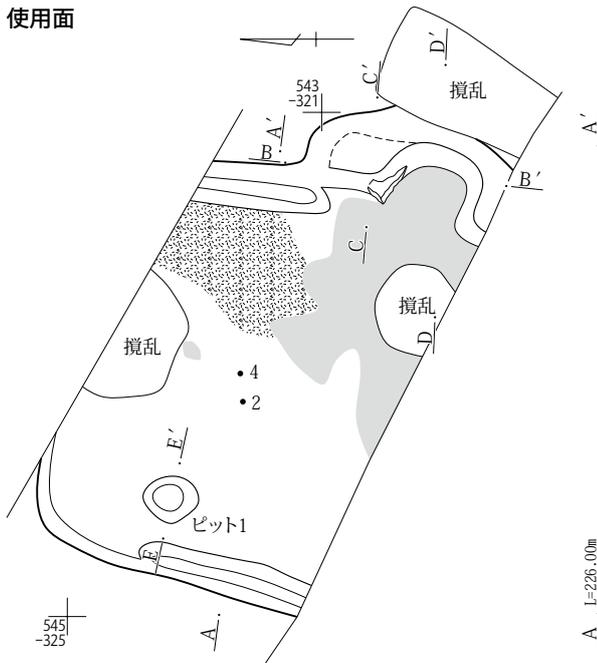
遺物 床面中央で須恵器杯(2)、同椀(4)が出土するが、カマドを含めて遺物の出土は少ない。掲載遺物のほか、土師器小型製品片3点、同大型製品片191点、同不明片111点、須恵器大型製品片1点、灰釉陶器瓶類片1点が出土する。近現代陶磁器3点は混入である。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

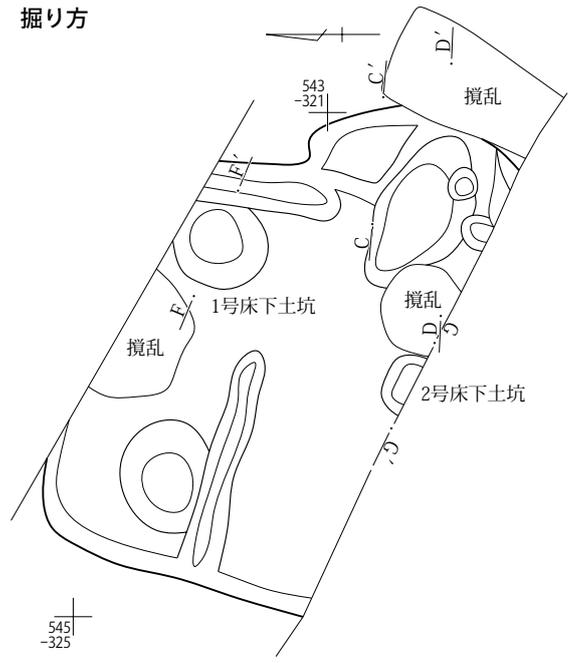
第4表 2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. PL.No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				底	口	口			
1	第8図 PL. 7	須恵器 杯	体部~底部	底	5.4		細砂粒・粗砂粒/還元焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	内外面摩滅。外面に煤付着
2	第8図 PL. 7	須恵器 杯	+2cm 体部~底部	底	5.4		細砂粒/還元焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
3	第8図 PL. 7	須恵器 椀	口縁~底部片	口 底	14.7 7.7	高 台 5.1 7.2	細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付け高台。	口縁部内外面以外の部分吸炭
4	第8図 PL. 7	須恵器 椀	床直 1/3	口 底	12.6 6.0	高 台 5.7 5.8	細砂粒/還元焰/オリーブ黄	ロクロ整形(右回転)。高台は付け高台。	
5	第8図 PL. 7	須恵器 壺	頸部片				細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)	内面に自然釉
6	第8図 PL. 7	土師器 甕	口縁~胴部片	口	18.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	頸部外面に輪積み痕
7	第8図 PL. 7	土師器 甕	口縁~胴部片	口	16.6		細砂粒・軽石・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
8	第8図 PL. 7	土師器 甕	口縁~胴部片	口	18.0		細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	

使用面

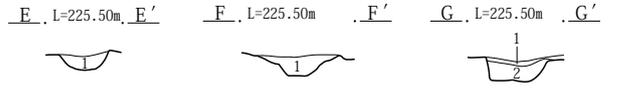


掘り方

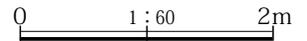


2号住居

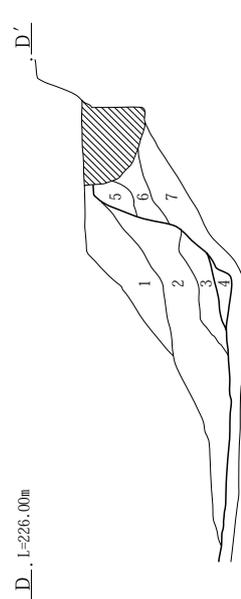
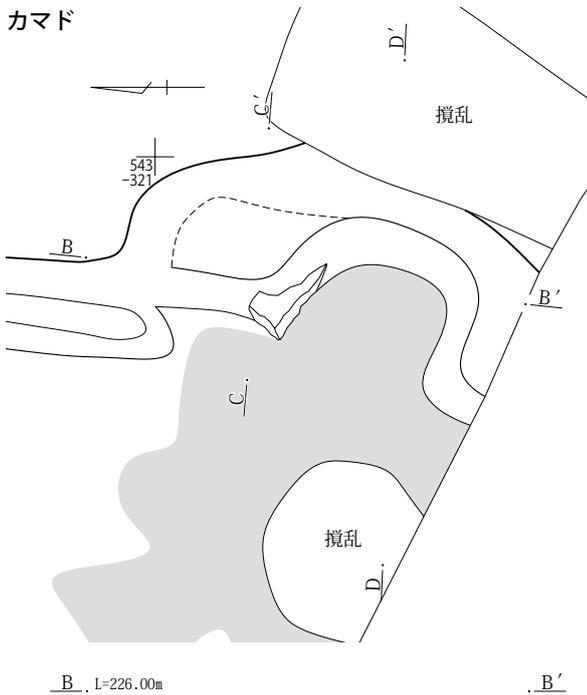
- 1 黒褐色土 褐色粒10%、FP 1%含む。
- 2 暗褐色土 褐色粒・FP10%、褐色粒・ローム粒・焼土粒 1%含む。
- 3 暗褐色土 褐色粒10%含む、ローム粒 1%含む。
- 4 黒褐色土 褐色粒10%含む。
- 5 極暗褐色土 褐色粒・ローム粒 1%含む。
- 6 暗褐色土 FP・褐色粒・ローム粒 1%含む。
- 7 ロームブロック



- ピット
- 1 暗褐色土 ローム大ブロック40%含む。
- 床下土坑
- 1 暗赤褐色土 焼土20%、ローム粒10%含む。



カマド



2号住居カマド

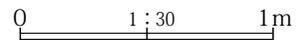
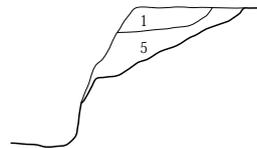
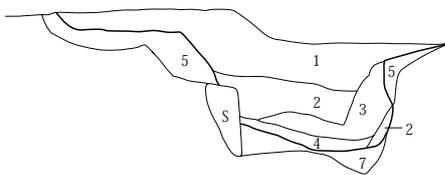
- 1 暗赤褐色土 FP・褐色粒 1%、焼土10%、ローム粒・粘土 1%含む。
- 2 にぶい赤褐色土 FP 1%、焼土粒20%、ローム粒 1%含む。
- 3 灰白色粘質土 焼土粒 1%、灰10%含む。
- 4 褐灰色土 焼土粒 1%、灰20%含む。
- 5 にぶい橙色土 ローム小ブロック10%、粗粒岩片10%、灰色大ブロック 5%含む。
- 6 にぶい橙色土 灰色粘土大ブロック10%含む。
- 7 にぶい橙色土 褐色土大ブロック 5%、焼土大ブロック20%含む。

B, L=226.00m

B'

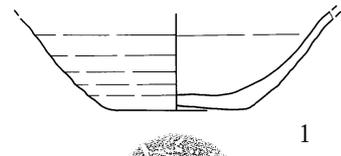
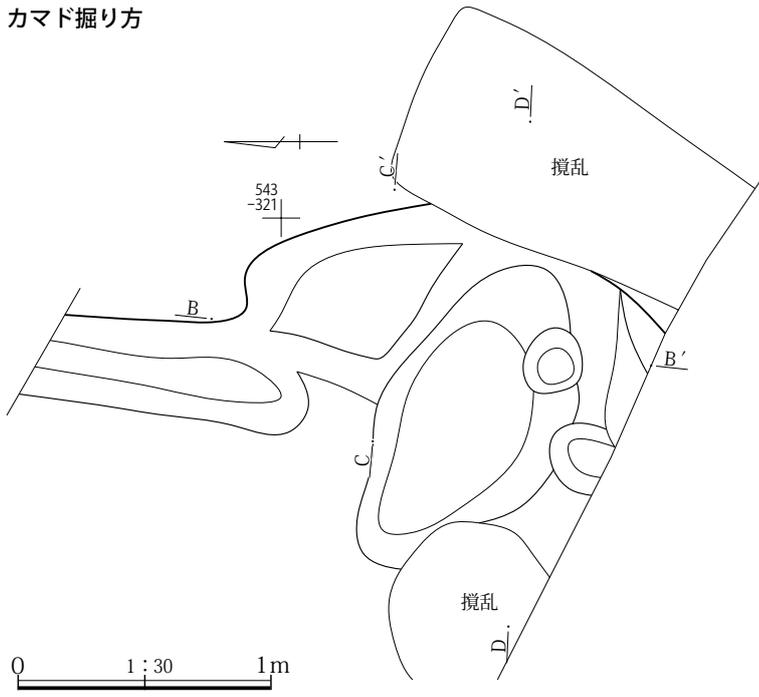
C, L=226.00m

C'

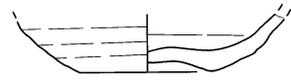


第7図 2号住居

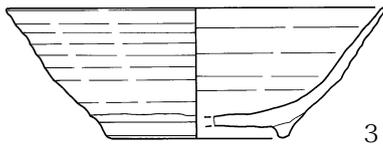
カマド掘り方



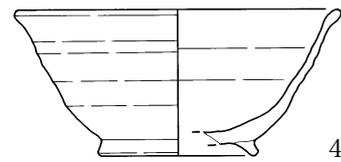
1



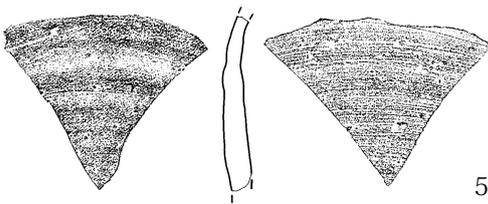
2



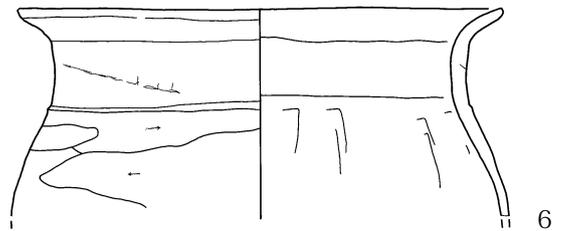
3



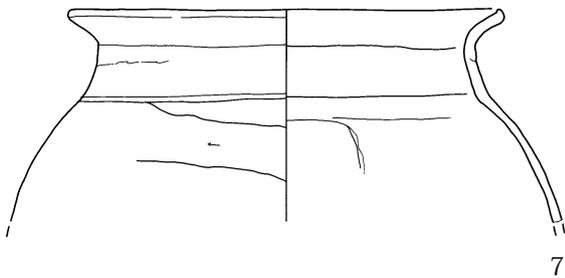
4



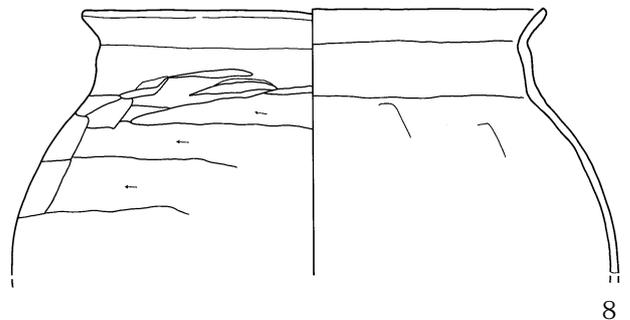
5



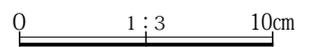
6



7



8



第8図 2号住居と出土遺物

2 土坑

調査区中央から東端にかけて、8基が検出された。3・4号土坑は形態から縄文時代の陥し穴とみられる。また、1号土坑は小規模な円形で、出土遺物から平安時代に比定される。2号土坑はピット状、5・6号土坑は楕円形で、いずれも小規模である。8・9号土坑は角が直角に近い方形で、遺物は伴わないが形態から中世以降と考えられる。

1号土坑(第9図、第5表、P L . 3)

位置 528-292。北半分は調査区域外となるが、平面形は乱れた円形。断面形は皿状。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土にロームブロックがやや目立つため、人為埋没の可能性がある。規模は長径(55)cm短径84cm深さ14cmである。確認面で、1の須恵器羽釜が出土する。出土遺物から平安時代に比定される。

2号土坑(第9図、P L . 4)

位置 529-294。平面形はピット状。断面形はU字形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土にロームブロックがやや目立つため、人為埋没の可能性がある。規模は長径67cm短径57cm深さ32cmである。遺物は近現代陶磁器が1点出土するが、混入の可能性もある。

3号土坑(第9・10図、第5表、P L . 4・7)

位置 523-281。南半分は調査区域外となるが、平面形は隅丸方形か。形態から陥し穴とみられる。断面形は円筒形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。底面は近くは壁面の崩落で埋まり、徐々に自然埋没したものと思われる。規模は長軸76cm短軸74cm深さ55cmである。

4・8号土坑(第9図、P L . 4)

4号土坑 位置 525-286。8号土坑より前出。平面形は隅丸長方形。形態から陥し穴とみられる。断面形は円筒形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。自然埋没と思われる。規模は長軸146cm短軸69cm深さ76cmである。

8号土坑 位置 526-287。4・9号土坑より後出。平面形は長方形。主軸方位はN-63°-W。断面形は箱形。

壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸227cm短軸90cm深さ49cmである。

5号土坑(第9図、P L . 4)

位置 538-312。北半部は調査区域外となるが、平面形は楕円形か。断面形はU字形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。自然埋没と思われる。規模は長径(49)cm短径59cm深さ13cmである。

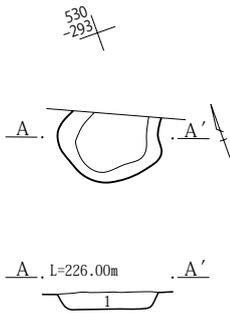
6号土坑(第9図、P L . 4)

位置 535-310。平面形はほぼ楕円形。断面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は著しく植物攪乱を受け、埋没状況不詳。規模は長径113cm短径(90)cm深さ21cmである。

9号土坑(第9図、P L . 4)

位置 527-289。8号土坑より前出。ほとんどが北側調査区域外となり、平面形は不明だが、南西隅が露呈しており、ほぼ直角に曲がる。断面形不明。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没の可能性も考えられる。規模は長軸(143)cm短軸(36)cm深さ28cmである。

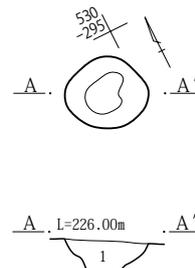
1号土坑



1号土坑

1 暗褐色土 ローム大ブロック10%含む。

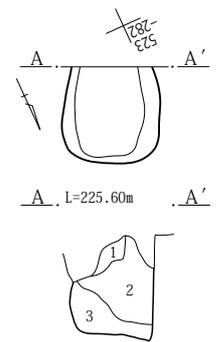
2号土坑



2号土坑

1 暗褐色土 ローム大ブロック10%含む。

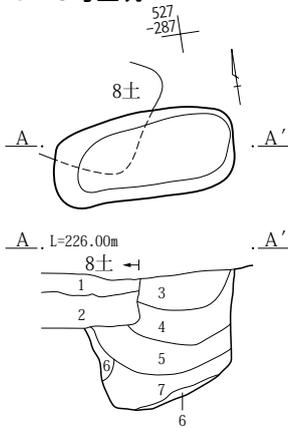
3号土坑



3号土坑

1 褐色土 ローム粒10%含む。
2 褐色土 ローム小ブロック10%、ローム粒10%含む。
3 にぶい褐色土 ローム大ブロック20%含む。
4 にぶい褐色土 ローム小ブロック10%含む。

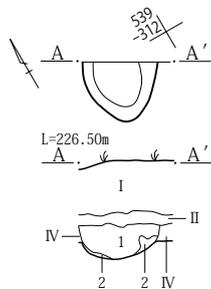
4・8号土坑



4・8号土坑

1 褐色土 ローム大ブロック10%、ローム粒10%含む。
2 黒褐色土 ローム小ブロック10%、ローム粒1%含む。
3 暗褐色土 黒褐色土ブロック10%、ローム小ブロック1%含む。
4 褐色土 ローム小ブロック10%含む。
5 褐色土 ローム大ブロック10%含む。
6 褐色土 ローム小ブロック10%、ローム粒10%含む。
7 にぶい褐色土 ローム小ブロック10%、ローム粒20%含む。

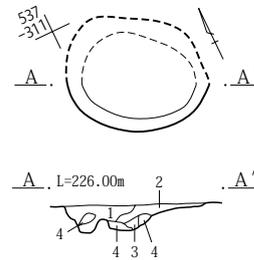
5号土坑



5号土坑

1 褐色土 ローム粒1%含む。
2 黄橙色土

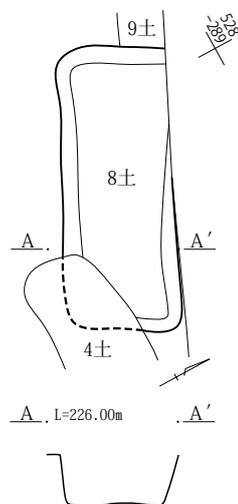
6号土坑



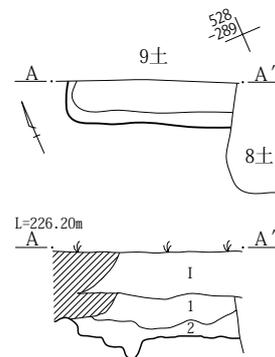
6号土坑

1 褐色土 黒褐色土ブロック10%、ローム粒1%含む。
2 暗褐色土 黒褐色土ブロック10%、ローム粒1%含む。
3 褐色土 ローム粒10%含む。
4 橙色土

8号土坑

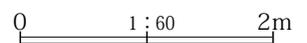


9号土坑



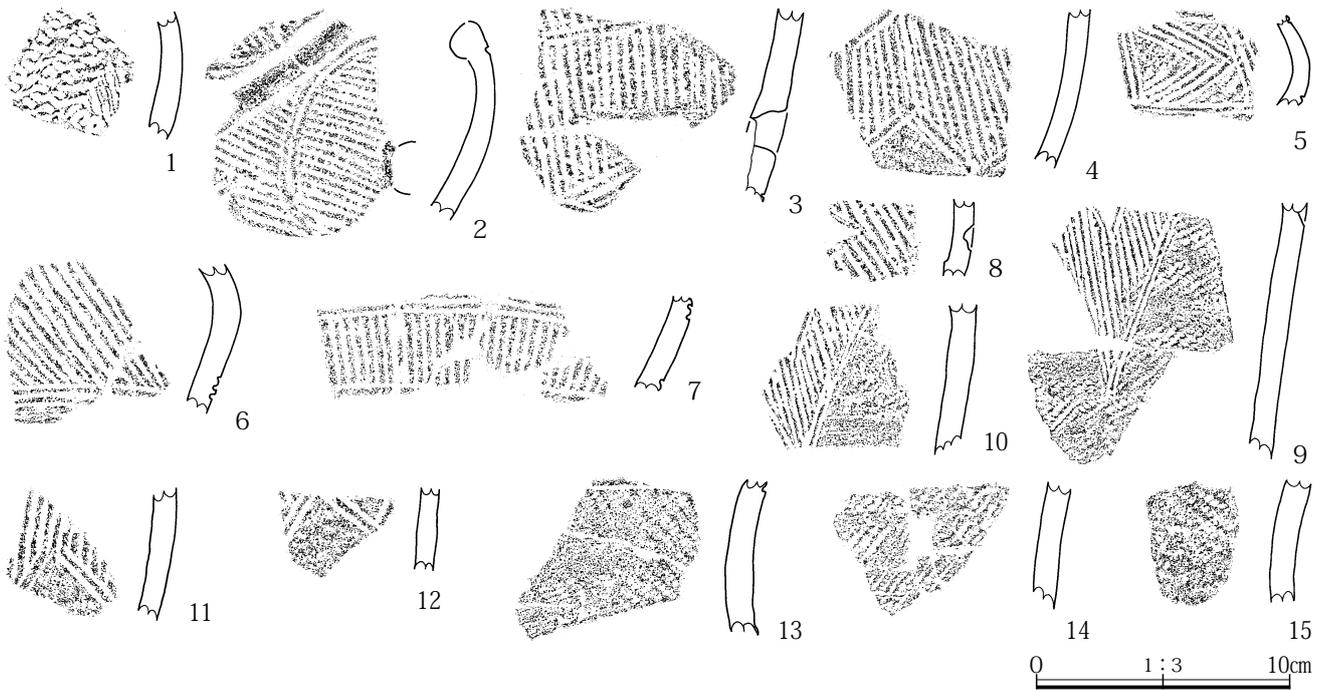
9号土坑

1 暗褐色土 ローム粒10%含む。
2 褐色土 ローム小ブロック5%、ローム粒10%含む。



第9図 1～6、8・9号土坑と1号土坑出土遺物

第3章 発掘調査の記録



第10図 3号土坑出土遺物

第5表 土坑出土遺物観察表

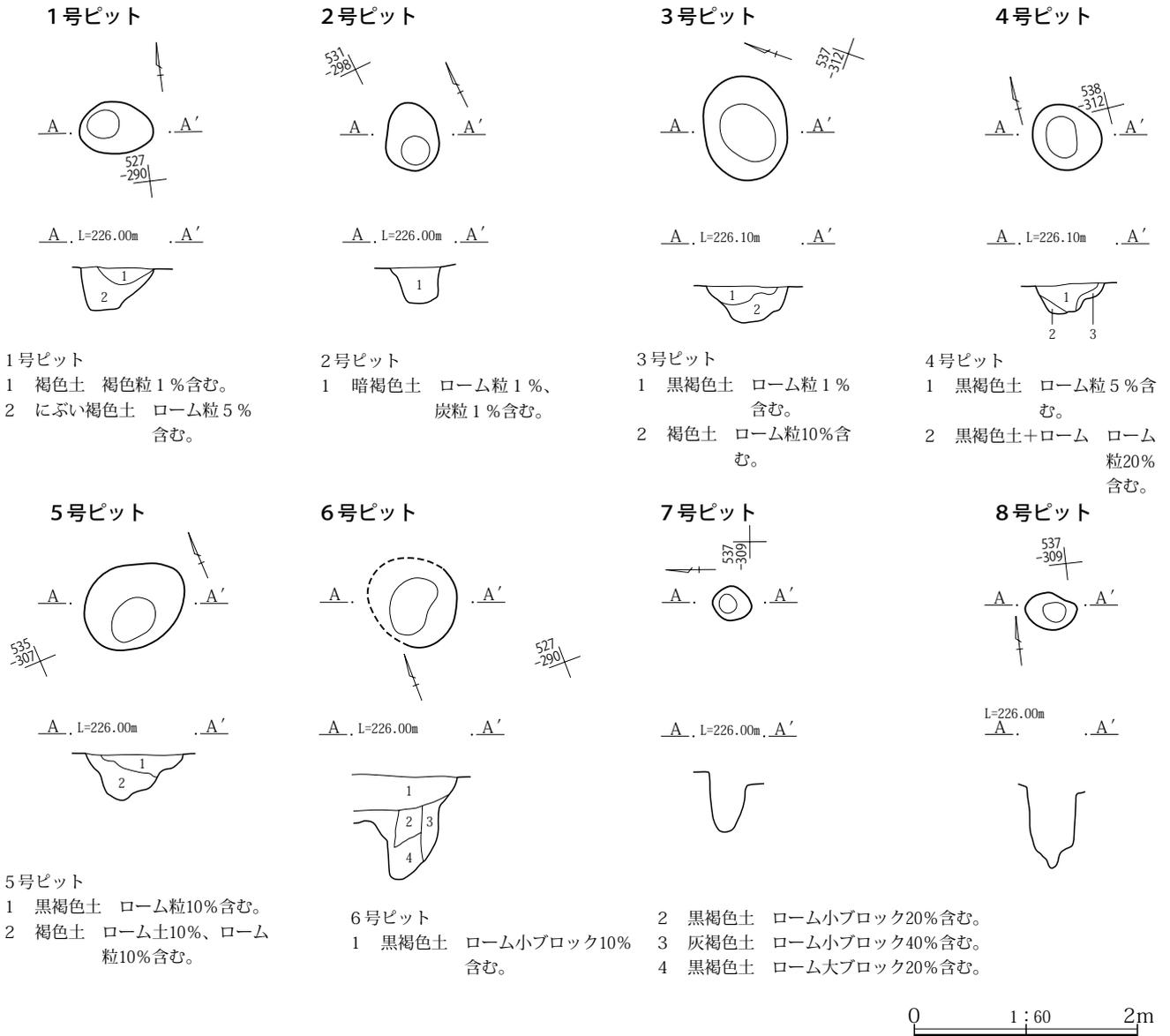
No.	挿図No. PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第9図	須恵器 羽釜	1土 胴部片				細砂粒・軽石／還元焰 ／灰オリブ	ロクロ整形(右回転)	

No.	挿図No. PL.No.	種別 器種	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	繊維	黄白	良好	胴部に閉端環付き縄(ループ縄文)を施す。	関山式
2	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 口縁部片	粗砂、細礫	褐橙	ふつつ	3・4と同一個体。波状口縁の口唇部に刻みをもち、口縁部文様に平行沈線で円状の文様を描き、円の中心に孔を有する。区画内に横位の平行沈線を施す。	五領ケ台式
3	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	褐橙	ふつつ	2・4と同一個体。胴部に三角印刻等を配して文様を描き、区画内に縦位の平行沈線を施す。	五領ケ台式
4	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	褐橙	ふつつ	2・3と同一個体。胴部の文様の下端を鋸歯状に区画し、区画内に縦位ないし斜位の平行沈線を施す。	五領ケ台式
5	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	褐橙	ふつつ	口縁部が湾曲し、平行沈線を横位に巡らせて区画し、区画内に平行沈線で縦位および横位矢羽根の文様を描く。地文にLRの縄文を施す。	五領ケ台式
6	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	7と同一個体。口縁部の湾曲部に斜位の平行沈線を施し、下端を横位に平行沈線を巡らせて区画する。	五領ケ台式
7	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	6と同一個体。胴部上位に平行沈線を横位に巡らせて区画し、区画内に平行沈線を縦位に施す。	五領ケ台式
8	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂	橙	ふつつ	胴部に三角状の印刻をもち、平行沈線を斜位に施す。	五領ケ台式
9	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂	黄褐	ふつつ	10と同一個体。胴部の文様の下端を鋸歯状に区画し、区画内に印刻を有し、縦位ないし斜位の平行沈線を施す。鋸歯状区画以下の胴部にはLRの縄文が施される。	五領ケ台式
10	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂	褐橙	ふつつ	9と同一個体。胴部の文様の下端を鋸歯状に区画し、区画内に縦位ないし斜位の平行沈線を施す。鋸歯状区画以下の胴部にはLRの縄文が施される。	五領ケ台式
11	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	胴部の文様の下端を鋸歯状に区画し、区画内に縦位の平行沈線を施す。	五領ケ台式
12	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	胴部の文様の下端を鋸歯状に区画する。	五領ケ台式
13	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	黄褐	ふつつ	胴部に平行沈線を横位に巡らせ、以下にRLの縄文を施す。	五領ケ台式
14	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	胴部にLRの縄文を施す。	五領ケ台式
15	第10図 PL. 7	縄文土器 深鉢	3土 胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつつ	胴部に縦位回転のLRの縄文を施す。	五領ケ台式

3 ピット(第11図、P.L. 4・5)

調査区の東側で、ピット6基が点在する。2・6・7・8号ピットは、深さも柱穴の可能性はある。前2者

の埋没土は締まりがなく、中世以降の所産と思われる。7・8号ピットは攪乱土坑の底面で検出されており、埋没土も不詳である。1・3～5号ピットは、埋没土に植物攪乱が著しく、浅いことから柱穴とは見なしにくい。



第11図 ピット

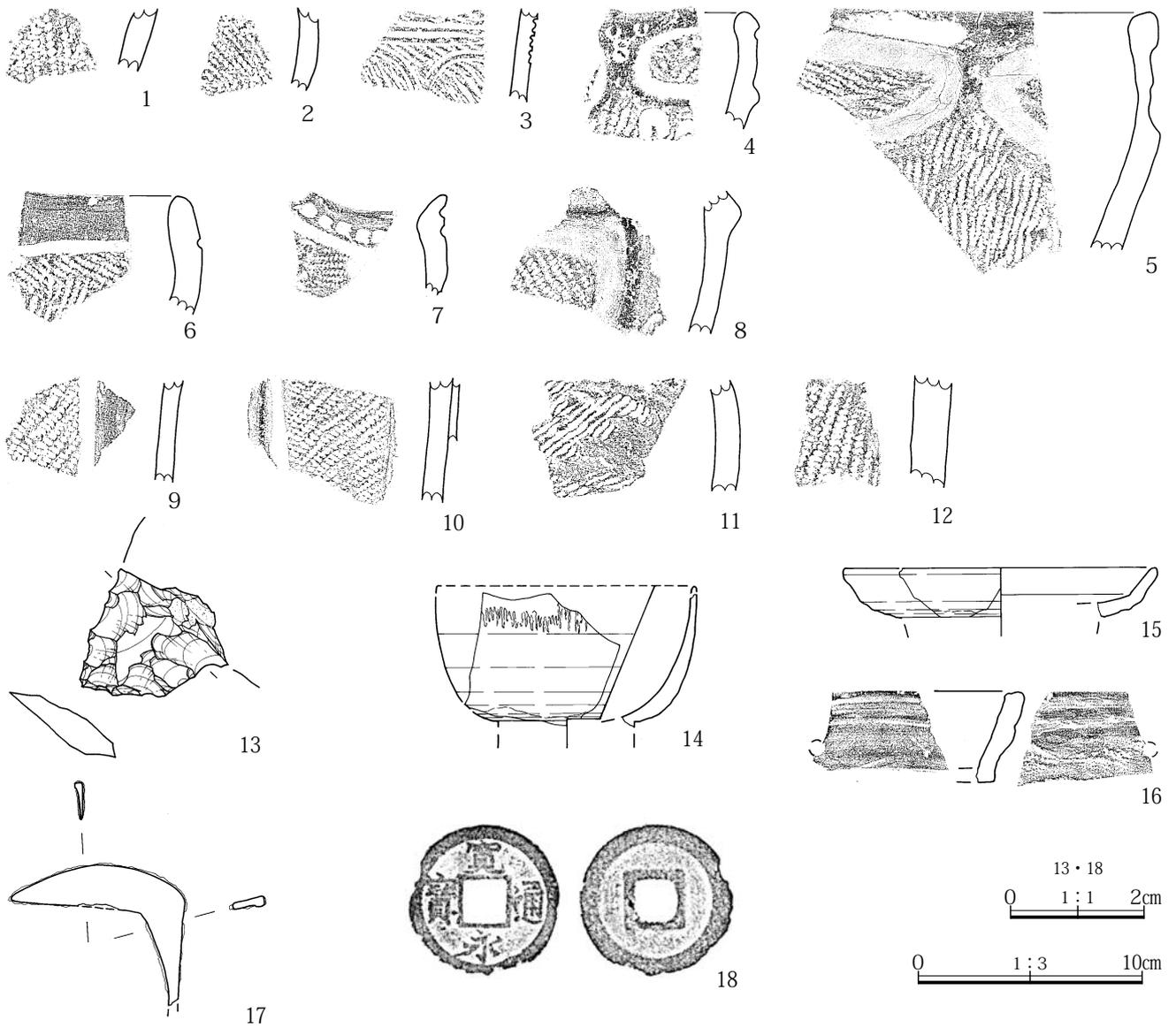
4 遺構外出土遺物(第12図、第6・7表)

縄文土器では、花積下層I式(1)、黒浜式(2)が出土しており、本遺跡内では前期の遺構は検出されなかったが、周辺に当該期の遺構が存在することを想定することができる。また、17の鉄鎌、18の銅銭(寛永通宝)は、攪乱からの出土となったが、その下位には7・9号土坑があり、そこからの混入も考えられる。その場合、周辺で

検出された3号土坑も含めた土坑群の時期を考える資料となる。

掲載遺物のほか表土などから、土師器不明片6点、須恵器小型製品片1点、近世国産磁器片5片、同施釉陶器片6点、同在地系焙烙・鍋片4点、同在地系皿片1点、近現代陶磁器片1点、同土器類10点、同瓦7点、時期不詳土器類1点が出土している。

第3章 発掘調査の記録



第12図 遺構外出土遺物

第6表 遺構外出土遺物観察表(1)

No.	挿図No. PL.No.	種別 器種	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	繊維	黄褐	ふつう	LRとRLによる縦長の菱状となる羽状縄文を施す。	花積下層I式
2	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	繊維	橙	ふつう	胴部にLRLの縄文を施す。	黒浜式
3	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂、雲母	暗褐	良好	胴部に平行沈線を横位に巡らせ、その下に平行沈線で弧状区画し、区画内に斜位の平行沈線を施す。地文にRLの縄文を施す。	五領ヶ台式
4	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	粗砂、細礫	黄褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内にLRの縄文を施す。胴部には蕨手懸垂文を有し、縄文を施す。	加曾利E3
5	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	粗砂、細礫	黄褐	ふつう	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様を描き、楕円区画内にRLの縄文を施し、胴部には斜位回転のRLの縄文を施す。	加曾利E3
6	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	粗砂、細礫	橙	ふつう	波状口縁の口縁部に横位の沈線と、LRとRLによる羽状縄文を施す。	加曾利E3

第7表 遺構外出土遺物観察表(2)

No.	挿図No. PL.No.	種別 器種	出土位置 残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
7	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	粗砂、細礫	黄褐	ふつう	内反する波状口縁の口縁部に刺突列と沈線を巡らせ、LRの縄文を施す。	加曽利E3
8	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂	褐橙	ふつう	口縁部に隆帯と太い沈線で文様を描き、胴部は隆帯を懸垂させ、RLの縄文を施す。	加曽利E3
9	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂	褐橙	ふつう	胴部に懸垂文で区画し、縦位の区画帯内には無文帯と縦位回転のRLの縄文を施す。	加曽利E3
10	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂	暗褐	ふつう	胴部に隆帯と沈線を懸垂させて区画し、縦位の区画帯内に縦位回転のRLの縄文を施す。	加曽利E3
11	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂	灰黄	ふつう	胴部にLの縄文を施す。	加曽利E3
12	第12図 PL. 8	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	粗砂、白色 粒	黄橙	ふつう	胴部に縦位回転のRLの縄文を施す。	加曽利E3

No.	挿図No.	器種	出土位置 残存	形態・素材	製作状況・使用状況	石材	長さ	幅	厚さ	重さ (g)
13	第12図 PL. 8	石鏃	表土	凹基無茎鏃	未製品。左辺側「返し部」の破片。加工は粗く、製作途上に破損したものと見られる。	珪質頁岩	(1.9)	(2.2)	0.4	1.8
	非実測	打製石斧	表土	短冊型	完成状態。頭部破片。全体的に磨滅しており、詳細は不明。	ホルンフェルス	3.9	3.0	0.6	10.4
	非実測	打製石斧	表土	短冊型	完成状態。刃部摩耗が著しいほか、捲層痕も弱く残る。	珪質頁岩	11.1	4.7	1.2	89.9
	非実測	加工痕ある 刮片	表土			珪質頁岩	8.2	4.4	1.4	59.5
	非実測	加工痕ある 刮片	表土			ホルンフェルス	4.1	2.0	0.8	7.1

No.	挿図No. PL.No.	種別	器形	出土位置 残存	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	胎土	色調	形・成調整等	備考
14	第12図 PL. 8	美濃陶器	尾呂茶碗	表土	—	—	—			体部上位から口縁部は直立気味に延びる。内面から高台脇に飴釉。口縁部内外面にうのふ釉。	17世紀末～ 18世紀前半
15	第12図 PL. 8	瀬戸・美濃陶器	皿	表土	(6.5)	—	—		淡黄	口縁部は屈曲して内湾。内面口縁部下に浅く細い圈線。内面から体部外面に施釉。焼成不良のため釉の種類は不明。	江戸時代
16	第12図 PL. 8	在地系土器	焙烙	表土	—	—	—		暗灰、 暗黒	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、内面の器表は暗灰色、外面の器表は黒色。器壁が厚く、口縁部は内傾。外面中位に接合痕残る。外面下位に皺状亀裂。底部を除く外面に煤付着。外面下位の割れ口に焼成後の補修孔1カ所残る。	江戸時代

No.	挿図No. PL.No.	種別	器形	出土位置 残存	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	重さ	形・成調整等	備考
17	第12図 PL. 8	鉄製品	鉄鎌	ほぼ完形	7.7	6.3	0.4	19.16	小型の鉄鎌、裏側は背にそって鑄状にへこんでいる、茎は断面4角形のまま三角状に細くなり端部は決算する。目釘孔は見られず端部細くし折り曲げて目釘で固定する形状と推定される。刃先の形状から右利き用と見られる	メタル残存
18	第12図 PL. 8	銅製品	銅銭	ほぼ完形	2.37	2.28	0.12	2.18	寛永通宝。劣化・破損により外縁の一部を欠く、表面の郭に対し裏面の郭は倍以上の幅を有する、外輪幅も表面2mmに対し裏面3mmと幅が広い	中心部分にメタルが残存するが、表面は劣化し脆弱

第3節 まとめ

縄文時代 縄文時代中期の遺構として、中期前半では3号土坑が確認できた。形態から陥し穴と考えられ、同様な形態を持つ4号土坑も同時期の可能性が高い。中期後半では住居1軒が調査できた。遺構の半分は南側調査区域外にある上、全体に攪乱が著しく、床面も判然としなかった。この時期は、石組み炉を持つと考えられるが、調査区内では検出されなかった。これまでの周辺における調査も踏まえれば、更にこの台地上に集落の広がりも推測される。

平安時代 9世紀第3四半期の住居1軒と、小規模な円

形の土坑1基が確認できた。カマドは焚き口にやや大きな礫を補強材として使い、煙道部も盛り土を伴って、やや外側に盛り上がっていた可能性が考えられる。

中世・近世 遺物を伴う遺構がなく、年代観も定まらないが、8・9号土坑やピット6基が、この時期と考えられる。概ね東方の交差点寄りに分布することからも、街道沿いの居宅に関係すると思われるが、判然としない。近世の出土遺物も一般的であり、宿場を思わせるものはなかった。ピットには掘立柱建物の柱穴を思わせる規模もあるため、江戸時代前期以前の建物の存在をうかがわせる。

報告書抄録

ふりがな	こめのあしぬまいせき
書名	米野芦沼遺跡
副書名	(主)渋川大胡線社会資本総合整備(活力基盤(交安))事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	550
編著者名	新倉明彦／飯森康広
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20121119
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	こめのあしぬまいせき
遺跡名	米野芦沼遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししふじみまちこめの
遺跡所在地	群馬県前橋市富士見町米野
市町村コード	10201
遺跡番号	90142
北緯(日本測地系)	362743
東経(日本測地系)	1390336
北緯(世界測地系)	362754
東経(世界測地系)	1390324
調査期間	20120701-20120730
調査面積	210
調査原因	道路建設
種別	集落／散布地
主な時代	縄文／平安／中世／近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居1+土坑2-土器+石器／集落-平安-竪穴住居1+土坑1-土器／集落-中世・近世-土坑5+ピット8-陶磁器+金属器
特記事項	竪穴住居は縄文時代中期後半1軒と9世紀第三四半期1軒を調査した。
要約	縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。縄文時代と平安時代の竪穴住居各1軒を検出し、縄文時代の陥し穴2基を含む土坑、ピットを調査した。

写真図版



調査区東側全景（東から）



調査区東側全景（西から）



調査区西側全景（東から）



1号住居全景（北から）



1号住居遺物出土状態（北から）



1号住居掘り方全景（西から）



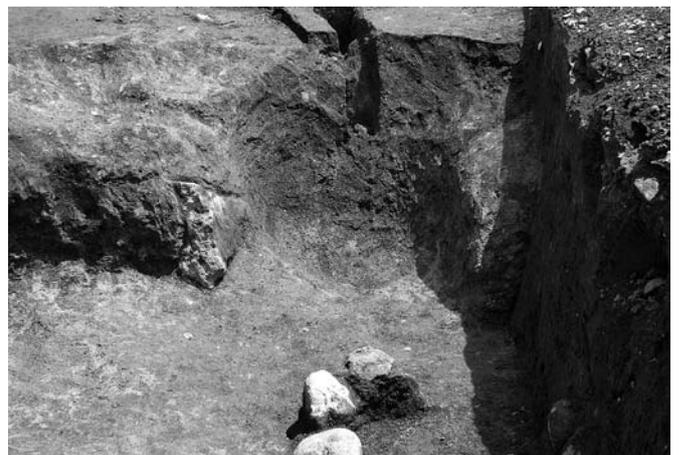
2号住居掘り方全景（西から）



2号住居全景（西から）



2号住居土層断面（南から）



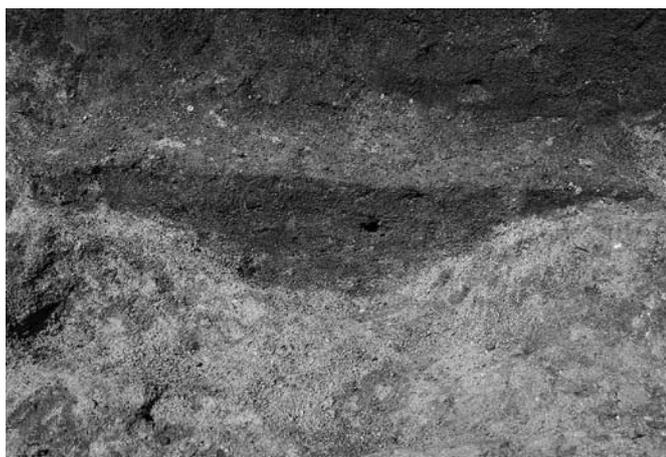
2号住居カマド全景（西から）



2号住居カマド掘り方全景（西から）



2号住居カマド土層断面（西から）



2号住居内土坑1土層断面（南から）



2号住居カマド掘り方土層断面（北西から）



2号住居P1土層断面（南から）



2号住居内土坑2土層断面（北から）



1号土坑全景（南から）



1号土坑土層断面（南から）

PL.4



2号土坑全景（南から）



2号土坑土層断面（南から）



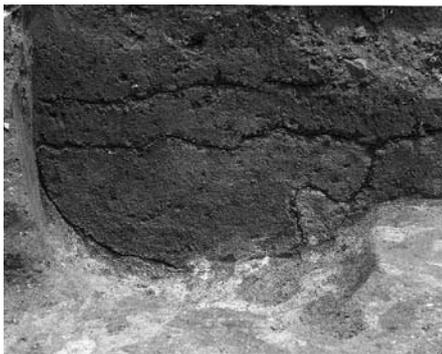
3号土坑調査風景（北から）



4号土坑全景（東から）



4号土坑土層断面（南西から）



5号土坑土層断面（南から）



6号土坑土層断面（南から）



8号土坑全景（南から）



8号土坑土層断面（南から）



9号土坑全景（南から）



1号ピット全景（南から）



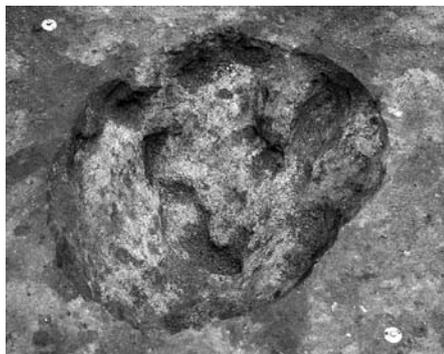
1号ピット土層断面（南から）



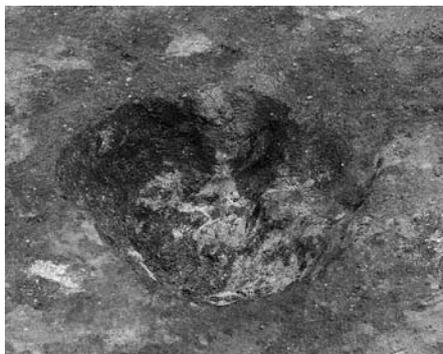
2号ピット全景（南から）



2号ピット土層断面（南から）



3号ピット全景（南から）



4号ピット全景（南から）



5号ピット全景（南から）



3号ピット土層断面（南西から）



4号ピット土層断面（南から）



5号ピット土層断面（南から）



6号ピット土層断面（北から）



7号ピット全景（南から）



8号ピット全景（南から）



1号旧石器調査坑土層断面（南から）



2住1



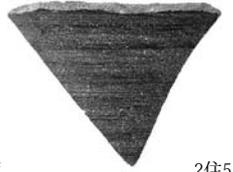
2住2



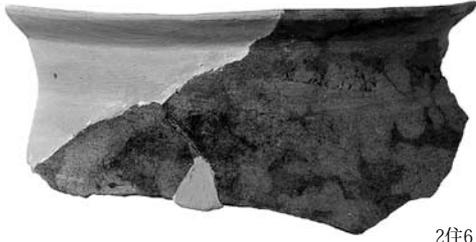
2住3



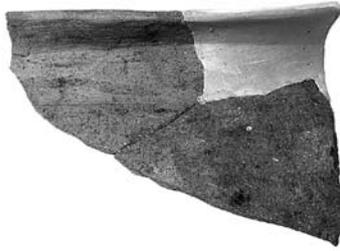
2住4



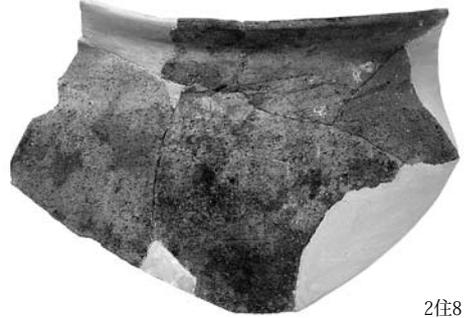
2住5



2住6



2住7



2住8



3土1



3土2



3土3



3土4



3土5



3土6



3土7



3土8



3土10



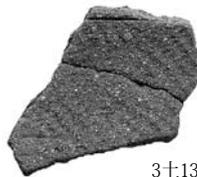
3土9



3土11



3土12



3土13



3土14



3土15

PL.8



遺構外1



遺構外2



遺構外3



遺構外4



遺構外5



遺構外6



遺構外7



遺構外8



遺構外9



遺構外10



遺構外11



遺構外12



遺構外13(1/1)



遺構外14



遺構外15



遺構外16(1/4)



遺構外17



遺構外18(1/1)

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第550集

米野芦沼遺跡

(主) 渋川大胡線社会資本総合整備（活力基盤（交安））事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年11月12日 印刷

平成24(2012)年11月19日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2

電話 (0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社
